

# 漁況海況予報調査

## I 目的

この調査は、沿岸沖合漁業に関する漁況海況の調査研究および資源調査の結果にもとづいて予報を作成することにより漁業資源の合理的利用と操業の効率化を図り、もって漁業経営の安定に資することを目的とする。

## II 内容

1. 調査期間 昭和47年4月～48年3月
2. " 海域 本県、日本海、津軽海峡、太平洋沿岸及び沖合
3. 調査員及び調査船

調査員	主	技師	赤羽光秋
	副	課長	浅加信雄
		技師	十三邦昭
		技師	田村真通
	臨時		戸沢一雄
調査船	試験船	幸洋丸	
	"	瑞鶴丸	
	"	東奥丸	
	"	青鵬丸	

### 4. 調査項目

#### (1) 海況調査(定線海洋観測)

- ・各層測温・塩検 0・10・20・30・50・75・100・150・200・300・400・500m  
(但し沿岸定線は300mまでの10層)

- ・魚卵・稚仔採集及び査定
- ・プランクトン採集及び査定
- ・気象観測 天候、気温、風向風力、気圧、雲量
- ・海象観測 波浪、うねり、水色、透明度
- ・見張調査

#### (2) 漁況調査

- ・県内主要9港(沢辺、深浦、鰯ヶ沢、小泊、三厩、佐井、大畠、白糠、八戸)における主要8魚種(スルメイカ、サバ、マグロ、ブリ、タイ、ヤリイカ、サクラマス、アブラツノザメ)について、日別、魚種漁業別出漁隻数、漁獲量、魚体、漁場を調査した。

### 5. 調査方法

- (1)は試験船により1、2月を除く毎月1回調査を行い、分析及び整理は本場内で行った。
- (2)は各地区担当の普及員に毎月報告を依頼し、これを取りまとめた。

## III 調査結果

### 1. 47年の海況

#### (1) 日本海における暖流の北上流量

計算で求めた戸作崎西方海域における対馬暖流の北上流量を1.1表に示した。

1.1表 対馬暖流の月別北上流量

 $10^6 \text{ m}^3/\text{sec}$ 

年 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月
S 4 7 年	2.4	2.8	5.5	5.4	3.6
S 4 3 ~ 4 6 年平均	1.5	1.9	2.6	3.9	3.0

本年の流量は、過去4ヶ年の平均値にくらべて各月とも大きく、特に7月は2倍強に達し、強勢であった。また暖流域の水温は春から冬にかけて、平年よりも終始高めに推移した。

#### (2) 津軽暖流域の面積と水温

面積は5月幾分狭かったが6月以降平年並となった。なお、7月からこの流域南側は、近海を北上する黒潮分派と接し、特に岩手県沿岸域は黒潮分派のため高温となった。

本県沖におけるこの水域の水温は、対馬暖流の強勢を反映して高めに推移した。

#### (3) 親潮域

5月までは第1分枝の接岸はやや顕著であったが、6月以降津軽暖流の増勢及び近海の黒潮北上分派の強勢と相まって第1分枝の勢力は非常に弱くなり、以後143~145Eを南下する第2分枝に勢力が集中した。なお親潮域の水温は例年より高めで、全体にこの水域は弱勢であった。

#### (4) 混合域

近海の黒潮分派は、4月より岩手県沿岸付近に接近しているのが認められ、以後幾分かは北上したが、概ね岩手県沿岸域に存在し、比較的規模が大きく、かつ位置が西側に偏っている等の点は例年とは異っていて、本年東北海域の海況の大きな特徴となった。

### 2. 稚魚査定

頭足類 1属1種

魚類 9属12種が査定された。

特に漁業的に重要なと思われる種としてサンマ、メバル属の1種、ホッケの稚魚が見られた。

### 3. プランクトン査定

優占的に出現した種は原生動物1属1種、腔腸動物1属、毛顎動物1属、筋足動物12属 20種である。

5~10月 1地点当たり平均湿重量は出現種の関係から5月に最高で月が進むにつれて減少の傾向が見られる。

### 4. 47年の漁況

#### (1) 日本海

1本釣によるスルメイカ漁業は夏季においては1隻当たりの漁獲量、総漁獲量(4,225トン)とも平年をやゝ下廻る程度であった。また秋季における1隻当たり漁獲量、総漁獲量(2,123トン)とも平年を上廻った。定置網による漁況については、アジ、マサバとも良好であったが、ブリ、マグロ及びマダイは低調であった。また本年の特異現象として、10~11月に大型定置網に例年になく大羽イワシが多く入網した。

#### (2) 太平洋

八戸近海における夏季のスルメイカ漁獲量は、9,155トン、秋季には13,850トンで共に平年漁獲量を下廻った。又サバは、八戸港に水揚された三陸ものは20,2,427トンで昨年を僅かに下廻ったが、一方道東からの搬入サバは5,080トンで、これまでの最高を記録した。